

1. 感染症速報

令和7年6月13日作成

第23週 6月2日		～ 6月8日		作成元:長崎県吉岐保健所 企画保健課							
状況	定点当り	疾患名	状況	定点当り	疾患名	状況	定点当り	疾患名	状況	定点当り	
インフルエンザ		RSウイルス感染症			咽頭結膜熱			A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		急性呼吸器感染症 (ARI)	
警報:開始30 終息10	0.00	警報:開始 - 終息 -	0.00	警報:開始3 終息1	0.50	警報:開始8 終息4	0.00	警報:開始 - 終息 -		51.33	
感染性胃腸炎		水痘			手足口病			伝染性紅斑			
警報:開始20 終息12	6.00	警報:開始2 終息1	0.00	警報:開始5 終息2	0.00	警報:開始2 終息1	0.00				
突発性発しん		ヘルパンギーナ			流行性耳下腺炎			新型コロナウイルス感染症			
警報:開始 - 終息 -	0.00	警報:開始6 終息2	2.50	警報:開始6 終息2	0.00	警報:開始 - 終息 -	0.67				
	発生報告なし		少数の発生あり		流行に注意【注意報レベル】				流行中【警報レベル】		

※定点数3:インフルエンザ 新型コロナウイルス感染症 急性呼吸器感染症 (ARI)
 ※定点数2:上記以外の疾患
 ※急性呼吸器感染症 (ARI)とは、急性の上気道炎(鼻炎、副鼻腔炎、中耳炎、咽頭炎、喉頭炎)又は下気道炎(気管支炎、細気管支炎、肺炎)を指す病原体による症候群の総称です。インフルエンザ、新型コロナウイルス、RSウイルス、咽頭結膜熱、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナなども含まれ、報告数は重複します。

※警報レベル基準値は表示のとおり(-は設定なし)。注意報レベル基準値は、インフルエンザ:10 水痘:1 その他は設定なし。

2. トピックス

★腸管出血性大腸菌感染症に注意しましょう

吉岐管内において、6月10日に腸管出血性大腸菌感染症 (O111) の発生が報告されました。

腸管出血性大腸菌感染症は、O157やO111、O26をはじめとした「腸管出血性大腸菌」による感染症です。

主な感染経路は、菌に汚染された食品や患者の便で汚染されたものに触れた手を介した経口感染です。2日から9日の潜伏期間の後、腹痛・水様性下痢・血便などの症状を呈します。無症状の場合もありますが、発症者の約6%から7%が、溶血性尿毒症症候群 (HUS) や脳症などの合併症を起こし、時には死亡することもあります。特に、抵抗力が弱い小児や高齢者等は注意が必要です。

例年5月ごろから報告数が増加する傾向にあります。次の点に気をつけて感染予防に努めましょう。

また、症状があるときは速やかに医療機関を受診しましょう。

○帰宅時やトイレ・オムツ交換の後、調理・食事の前には石鹸と流水で十分に手を洗いましょう

○肉類を調理する際は十分に加熱しましょう

○生肉を調理する際、器具は専用のものにするか、使用後すぐに十分な洗浄・消毒をしてから他の調理に使用しましょう

○下痢症状のあるときは入浴は控え、シャワー浴または最後に入浴しましょう

～知って防ごう！ 腸管出血性大腸菌感染症～Part 1

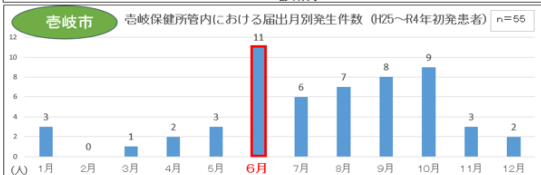
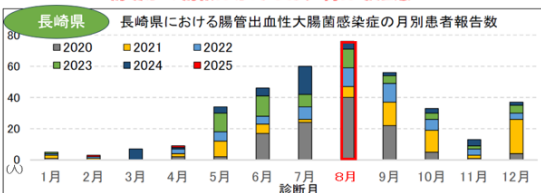
- ・夏になると、O157などの腸管出血性大腸菌感染症の危険性が高まります。
- ・肉の加熱不足や、生食は注意が必要です。しっかり加熱して食べましょう。また、生鮮野菜を食べて感染した事例も発生していますので、野菜はしっかり洗って食べましょう。なお、野菜の腸管出血性大腸菌を除菌するには、湯がき(100℃の湯で5秒間程度)が有効であるとされています。
- ・特に、抵抗力の弱い乳幼児や高齢者は重症化したり、集団感染を起こすことがあるので注意が必要です。



吉岐市では6月の発生が最も多く、県内でも罹患率の高い地域です!

腸管出血性大腸菌感染症 患者報告数 (月別)

～初夏から初秋にかけては、特に要注意!～



『腸管出血性大腸菌感染症』って、どんな病気？

- 原因菌 **ベロ毒素を産生する大腸菌**
(血清型:O157、O26、O111など)
- 症状 **激しい腹痛、下痢、血便**
重症化すると、腎臓や脳に後遺症を残す場合もあります
- 注意時期 暑くなるとともに細菌の増殖が速まるため、夏場は特に注意が必要!
- 潜伏期間 **1日～2週間 (平均3～5日)**
- 感染経路 菌が付いた食べ物を口にすることや、患者の便で汚染された物などを介して感染
特に保育所など乳幼児の集団生活では注意が必要!



(別添の「腸管出血性大腸菌(O157等)を防ぎましょう」もご覧ください。)

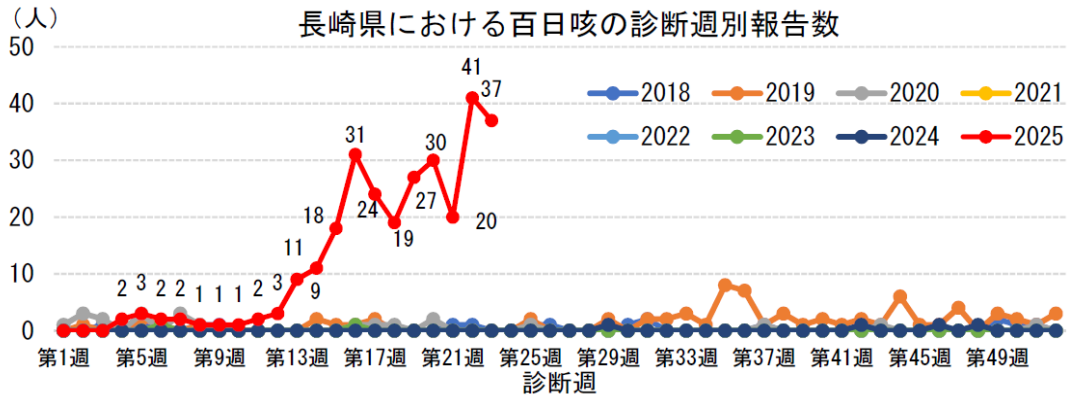
★百日咳の報告が多くなっています

壱岐管内において、全数把握疾患となった2018年以降、2025年は第23週まで5件と最多の報告数となっており、30代から50代の報告があつています。

百日咳は、主に百日咳菌の感染によっておこるけいれん性の咳発作を特徴とする気道感染症です。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり、次第に咳の回数が増え程度も激しくなります。夜間の咳発作が多いことも特徴で、回復までに2～3か月かかることもあります。また、乳児では、肺炎、脳症を合併し、重症化することもあります。

県内において、2025年第23週には37件の報告があり、年代別では、10代（16人）、10歳未満（9人）が多くなっています。また、2025年第23週までの284件の報告においても、10代（151件、53%）、10歳未満（68件、24%）が多く全体の約8割を占めています。

感染経路は飛沫感染ですので、咳エチケット、手洗い、手指消毒で予防に努めましょう。



★マダニやツツガムシが媒介する感染症に注意しましょう

マダニ類やツツガムシ類は、野外の藪や草むらに生息しているダニで、野生動物が出没する環境に多く生息しているほか、民家の裏山、裏庭、畑やあぜ道などにも生息しています。マダニ類は「日本紅斑熱」や「重症熱性血小板減少症候群（SFTS）」を媒介し、ツツガムシ類は「つつが虫病」を媒介します。県内では2025年第23週までにSFTSが6件、日本紅斑熱が8件報告されています。

マダニ類が媒介するSFTSは、発熱、消化器症状が主な症状で、重症化して死亡することもあります。近年、SFTSを発症したネコ及びビヌの症例が確認されており、これらの動物の血液や糞便からSFTSウイルスが検出されています。SFTS以外の感染症に対する予防の観点からも、動物を飼育している場合は過剰な触れ合いを控え、動物由来の感染に注意しましょう。

マダニ等が媒介する感染症の予防には、ダニに咬まれないことが重要です。野外で活動する際は、長袖、長ズボン、長靴を着用するなどして肌の露出を極力避け、マダニに有効な虫よけ剤を使用して感染防止に心がけましょう。もし、マダニ等に咬まれていたことに気づいた場合、無理に取り除こうとせず、皮膚科等の医療機関で適切に処置してもらいましょう。また、咬まれた後に発熱等の症状があった場合は、速やかに医療機関を受診しましょう。受診した医療機関では、咬まれた状況などをできるだけ詳細に説明しましょう。

長崎県におけるダニ媒介感染症の発生件数

年	2020	2021	2022	2023	2024	2025
SFTS	8 (3)	6 (1)	6 (4)	13 (7)	13 (11)	6
日本紅斑熱	18 (1)	28 (8)	22 (3)	14 (5)	23 (7)	8
つつが虫病	11 (0)	14 (1)	7 (0)	15 (3)	11 (1)	0

※()は第23週までの発生件数

腸管出血性大腸菌(O157等)を防ぎましょう

～手洗い消毒と食べ物の加熱殺菌をしっかりと～

- 夏になると、O157などの腸管出血性大腸菌感染症の危険性が高まります。
- 肉の加熱不足や、生食は注意が必要です。生鮮食品は、しっかり加熱しましょう。
- 特に、乳幼児や高齢者は重症化したり、集団感染を起こすことがあります。

『腸管出血性大腸菌感染症』って、どんな病気？

- **原因菌** ベロ毒素を産生する大腸菌（血清型：O157、O26、O111など）
- **症状** 激しい腹痛、下痢、血便などを引き起こします。重症化すると、腎臓や脳に後遺症を残す場合もあります。
- **注意する時期** 暑くなるとともに細菌の増殖が速まるため、夏場は特に注意が必要です。
- **潜伏期間** 1日～2週間（平均3～5日）
- **感染経路** 菌が付いた食べ物を口にすることや、患者の便で汚染された物などを介して感染します。特に保育所など乳幼児の集団生活では注意が必要です。

どうやって予防するの？

予防 手洗い

こまめに石けんで手を洗いましょう。

どんなときに手洗いするの？

- 外出から帰ってきたとき
- 調理の前、食事の前
- トイレ・おむつ交換の後
- 嘔吐物の処理をした後



予防 食品の取扱い

- 肉類は、十分に中まで火を通し、焼く箸と食べる箸を使い分けましょう。
- 肉を扱った調理器具は、まめに洗うか使い分けたり、熱湯等で消毒してから他の調理に使いましょう。
- 生で食べるサラダなどは、肉料理の前に調理しましょう。
- 野菜や果物は、水でよく洗いましょう。
- 調理後の長期保存を避けましょう。



症状が出たら？

- 血便等の症状がでた場合は、速やかに医療機関を受診しましょう。
- タオルの共用は避け、入浴は最後に入るかシャワーにしましょう。
- 患者のおむつや便の処理は、使い捨て手袋等をつけて行いましょう。患者の便で汚れた下着等は、塩素系消毒薬でつけ置き消毒をし、家族のものとは別に洗濯しましょう。
- 感染が疑われる子ども等は、プールは控えましょう。